

視覚言語によるビジュアルコミュニケーション研究

—特撮におけるメタファーの解読と再構築—

Research on Visual Communication through Visual Language

- Deciphering and Reconstructing Metaphors in TOKUSATSU -

■ 楊 嘯天 YANG Xiaotian

愛知県立芸術大学大学院 佐藤直樹研究室

Aichi University of the Arts

■ キーワード：視覚言語、メタファー、特撮、タイポグラフィ、ZINE、共感空間

はじめに

日本の特撮映像作品(以下、特撮[注1])は、世界的な影響を持つポップカルチャーでありながら、同時にその物語の深層には、放送当時の社会問題や思潮を反映した複雑かつ巧妙なメタファー(隠喩)が数多く散りばめられている。しかし、制作・発表から時代が経過するにつれて、それらのメタファーは本来の文脈から切り離され、解読が困難になっている現状がある。

本研究は、この課題に対し、特撮に隠されたメタファーを現代社会の文脈と再接続し、タイポグラフィを中心としたデザイン之力、すなわち視覚言語を用いて再構築することで、過去からのメッセージを未来へ向けた新たな声として提示することを目的とする。

その実践の核となるのが、個人自主編集冊子(以下、Zine)シリーズ『KAIKI』の制作である。さらに、Zineで展開される論考の理解を多角的に補助し、鑑賞者の共感を喚起するためのアウトプットとして、「特撮と当時の社会環境の視覚年表」、そして体験的な展示である「共感空間」を併せて設計・制作する。

1. 2024年度の研究

先行研究では、特撮作品群におけるメタファーの体系的な整理と分類、それらが生み出された歴史的・社会的文脈を客観的に分析するための独自モデルの構築、そして多角的な視点を取り入れるための文献研究や調査を行った。

1.1. メタファーにおける整理と分類

本研究では、分析対象とする特撮作品群に内包されるメタファーを網羅的かつ体系的に把握するため、まず対象作品[注2]の選定と内容分析を行った。国内外での再生回数順を基準として、受容度、批評的重要性、そしてメタファーの多様性を考慮し、『ウルトラQ』(1966年、全28話)、『ウルトラマ

ン』(1966年、全39話)、『ウルトラセブン』(1967年、全49話)、『帰ってきたウルトラマン』(1971年、全51話)、『ウルトラマンティガ』(1996年、全52話)、『ウルトラマンダイナ』(1997年、全51話)、『ウルトラマンガイア』(1998年、全51話)の計7作品、全321話を精査対象とした。

各エピソードの内容を詳細に記録・分析し(図1)、社会問題による、以下の6つの問題が主なテーマとして抽出された。

- ①環境汚染問題(例:公害、異常気象)
- ②科学の両刃性問題(例:核開発、倫理なき技術発展)
- ③差別と共存問題(例:異文化・異種族間の対立と理解)
- ④歴史と戦争問題(例:戦争の記憶、冷戦構造)
- ⑤政治暗喩問題(例:権力構造、賄賂問題)
- ⑥社会発展問題(例:人口過密、少子高齢化問題)

これらの6つのテーマが、本研究の中心的なアウトプットであるZineの基盤となる。



図1 メタファーの分析と整理(一部)

1.2. AI支援型・国際重要事象抽出モデルの概念構築

特撮作品におけるメタファーは、それが制作された時代の社会環境と不可分な関係にある。この関係性を客観的かつ多角的に分析するため、「特撮作品と当時の社会環境はどのような関係にあるのか?」という問いに対する分析モデルの概念構築を行った。

本モデルは、特定の年において、地球規模で影響を与えた、あるいは当時の社会思潮を象徴する重要事象を、以下

の 5 つの指標を用いて多角的に評価・抽出することを目的とする。

a. ニュース報道の頻度: 当該事象がメディアでどの程度報道されたか。

b. SNS での話題性: ソーシャルメディア上でどの程度言及され、議論されたか。(分析対象期間に応じて適用)

c. 社会参加と影響: デモ、運動、あるいは後世への文化的・社会的影響度。

d. 政策・公式行動への対応: 政府や国際機関による公式な声明、政策決定、行動への影響度。

e. ウェブ検索数: 人々の関心の高さを示す指標。(分析対象期間に応じて適用)

1945 年から 2025 年までを対象期間とし、世界主要国における政治・戦争・災害・科学・文化など多岐にわたる分野の重大事件を、多言語対応の AI を用いて分析することで、各時代の社会環境が明らかになった。従来の研究よりも客観的かつ多角的な視点から、各時代の「空気感」を捉え、特撮作品のメタファーが生まれた背景をより深く理解することが可能となった。

1.3. 文献研究とインタビュー

本研究をより豊かなものにするため、既存の知見の参照と、多様な立場からの意見収集を行った。例えば、特撮と戦後日本の関係性を論じた福嶋亮大『ウルトラマンと戦後サブカルチャーの風景』、ゴジラシリーズを中心に据え社会学的に分析した好井裕明『ゴジラ・モスラ・原水爆 特撮映画の社会学』などが挙げられる。これらの文献は、本研究における分析視角の確立に大きく寄与した。

さらに、文献だけでは得られない生の声や多角的な視点を取り入れるため、複数のインタビュー調査と対談も実施した。

2. Zine の内容

本研究の中心実践であり、特撮メタファーの再解釈と再構築を具体化する主要なアウトプットが、個人自主編集冊子(Zine)シリーズ『KAIKI』の制作である。

Zine とは、個人や小規模グループによって制作される出版物を指し、自己の視点や主張を反映させやすく、低コストで精緻な視覚表現を追求できるという利点を持つ。SNS の即時性や書籍の網羅性とは異なり、紙媒体特有の物質感と、編集者の意図が凝縮された構成によって、読者に深く思考を促す独自の体験を提供する。特に、権威や商業主義から距離を置く Zine の特性は、特撮作品に込められた批評的なメタファーを、現代的な視点から純粋に探求し表現する上で最適な媒体であると判断した。本研究では、この Zine を、特撮メタファーの視覚的再解釈とその現代的意義を伝達するための主要な表現媒体として位置づける。

2.1. コンセプト: 『KAIKI』

本 Zine シリーズのタイトルは『KAIKI』と定めた。

このローマ字表記のタイトルには、意図的に多層的な解釈の可能性を込めている。ここには、特撮作品が持つ「怪奇(かいき)性、過去の作品と思考を現代において再訪する「回帰(かいき)」、あるいは視点を転換し新たな軌道を描く「改軌(か

いき)」といった、様々な同音異義語を想起させる企図がある。これらはいずれも本研究が内包する側面である。

しかし、本研究が最終的に提示する核となるコンセプトは、光が影によって完全に覆われる天文現象である「皆既(かいき)」である。特撮作品が放つヒーローや希望といった眩い「光」の裏側には、必ずそれが生まれた時代の社会問題や矛盾といった「影」のメタファーが存在する。

『KAIKI』は、その光と影が最も深く重なり合う瞬間、すなわち「皆既」の瞬間に立ち会い、闇の中から新たな光の輪郭、すなわち現代的な意味や未来への洞察を見出すための試みであり、その思索の旅そのものを指し示すものである。

2.2. 『KAIKI』のシリーズ構成と編集構造

『KAIKI』は、全 8 巻から構成されるシリーズとして設計した(図 2)。前章 1.1 で分類した 6 つの社会問題テーマは、Vol.1 から Vol.6 のタイトルとなって、Vol.0 の創刊号と Vol.7 の特別号と合わせ、以下のタイトルに構成した。

Vol.0 『なぜ今、特撮を再解釈するのか?』(創刊号)

Vol.1 『怪獣が壊したのは、自然か、それとも人間社会か?』(環境汚染問題)

Vol.2 『科学は希望か、恐怖か?』(科学の両刃性問題)

Vol.3 『君は違うから敵なのか?』(差別と共存問題)

Vol.4 『戦いの意味は誰が決めるのか?』(歴史と戦争問題)

Vol.5 『正義の味方は、誰の味方?』(政治暗喩問題)

Vol.6 『豊かになって、僕らは幸せか?』(社会発展問題)

Vol.7 『我らの未来のため、輝けるものたちへ』(特別号)



図 2 『KAIKI』全 8 巻の表紙

創刊号は、シリーズ全体の序章として、本研究及び Zine 制作の目的、問題意識、そして「隠喩 = メッセージ」という核心的な視点を提示する。続く Vol.1 から Vol.6 までは、6 つの社会問題にそれぞれ対応し、各テーマを深く掘り下げる。そして最後の特別号は、シリーズ全体の総括として、特撮から得られる未来への教訓と希望を提示し、読者自身が行動を起こすことへの呼びかけを提示する。

各号の内部構成は、読者との多角的な対話を生むことを目指し、以下の 5 つの要素による設計した。

1) はじめに: 各号のテーマ設定と問題提起を行い、読者を思索の旅へと誘う。

2) 筆者の論考記事: Zine のコアとなる部分。特定の怪獣やエピソードを切り口に、メタファーの解釈、歴史的・社会的文脈の分析、そして現代的意義の考察を展開する。

3)参加型ページ: 読者自身がテーマについて思考し、記録・表現するためのインタラクティブなセクション。形式は各号のテーマに応じて変化させる。

4)寄稿・インタビュー: 筆者以外の多様な視点を取り入れる。特撮関係者、他分野の研究者、あるいは熱心なファンやクリエイターへのインタビューや論考の寄稿を掲載する。

5)おわりに: 各号の議論を総括し、読者への問いかけや次号への接続を行う。

3. デザイン仕様と制作プロセス

『KAIKI』のデザインは、以下の仕様に基づき制作を進めている。

3.1. 組版規則

本 Zine は、日本国内の研究成果であると同時に、国際的な視座と発信を目指すため、日本語と英語のバイリンガル組版(図 3)を採用する。将来的には、中国語バージョンでの展開も想定している。これにより、より広範な読者層との対話可能性を探る。レイアウトの基盤には、柔軟性と秩序を両立する 12 カラムグリッドシステムを採用し、複雑な日英混植でも可読性と視覚的な統一感を確保する。

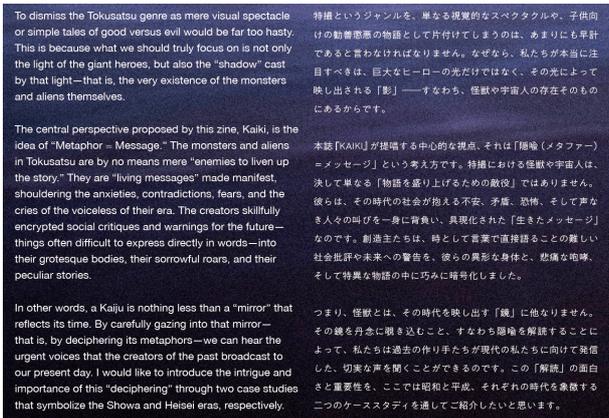


図 3 デザイン仕様

3.2. タイポグラフィ

和文本文書体には、可読性が高く、やや丸みを帯びた骨格がヒューマニスティックな温かみを感じさせるサンセリフ体「A P-OTF A1 ゴシック StdN」を選定した。欧文本文書体には、その和文書体との親和性が高く、モダンでありながら普遍的な信頼感を持つサンセリフ体「Helvetica Neue」を選定した。両書体とも過度な装飾性を排し、長文の読書に適したニュートラルな表情を持つことを重視した。

一方、各章のタイトルや本文中で特に強調したい箇所には、本文のサンセリフ体とは対照的な表情を持つ書体として、「筑紫 A オールド明朝(FOT-TsukuAOldMin Pr6N)」を採用した。その独特の墨溜まりや滲みが、本文書体の持つモダンさに対して、歴史性や人の手の温もりを感じさせるカウンターバランスとなる。また、その優美で格調高い雰囲気は、Zine 全体の知的な品位を高める効果も期待される。

3.3. 画像・写真

Zine で使用する画像(図 4)は、主に筆者自身がテーマリサーチのために撮影した写真である。そして一部写真は、友



図 4 画像・写真の使用例

人・知人から使用許諾を得た写真であり、著作権フリーの写真素材サイトから提供される画像である。写真は、あくまでテキストの内容を補完し、その雰囲気や醸成するための補助的な役割として位置づける。

3.4. 色彩設計・ページネーション

全体としては、批評的なトーンを反映し、モノクローム(黒、白、グレー)を基調とする。ただし、各号のテーマ性や特定のページの意図を強調するため、限定的にアクセントカラーを使用する場合がある。

各号のページ数は、表紙・裏表紙を含め 32 ページを基本とする。本文コンテンツは約 24 ページ以内に収め、読者が一気に読み通せるボリューム感を意識した。これは、Zine が持つコンパクトさとアクセシビリティの高さという特性を活かし、重厚長大な学術書とは異なる読書体験を提供するための意図的な設計である。

3.5. 用紙・印刷・製本

本制作における最終的な仕様として、用紙、印刷方式、および製本方法を以下の通り決定した。

用紙については、インクジェットプリンターでの適性と、Zine 特有のテクスチャ感を両立させるため、株式会社竹尾の「IJリーブル_薄口_93.5kg」を選定した。本紙はインクの吸収性が高く、デジタルデータでありながらアナログ印刷のような風合いを再現できる点が、本研究の視覚表現に適している。印刷には、顔料インク搭載のインクジェットプリンター「EPSON SC-PX1V」を使用する。

製本方式に関しては、Zine というメディアが持つ「手に取りやすさ」と「ページをめくる軽快さ」を最優先し、最もシンプルかつ一般的な「中綴じ製本」を採用した。

4. 修了展示

4.1. 視覚年表の制作

本研究の第二のアウトプットとして、壁面展示用の「特撮と社会環境の視覚年表」を制作した。

本年表は、Zine シリーズ『KAIKI』で論じられる各作品が、どのような時代背景や歴史的脈絡の中で生まれたのかを可視化し、鑑賞者の理解を補完・深化させることを目的としている。内容は、戦後 1945 年から 2025 年に至るまでの特撮作

品と、同時代の主要な国際情勢・社会事件を並列に整理したものである。

80年間に及ぶ時間の連続性と歴史の潮流を一覧するため、高さ 1.1m・全長 4.5m のロール紙印刷を採用した。この長尺のフォーマットを用いることで、Zine が担う「個別のテーマの深化」に対し、本年表(図 5)はそれらを繋ぐ「時代全体の俯瞰」という役割を果たしている。

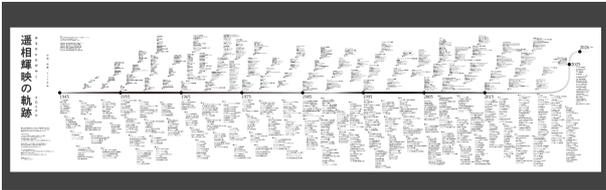


図 5 視覚年表

4.2. 共感空間

本研究の展示「共感空間」は、Zine による視覚情報の伝達に加え、鑑賞者に多感覚的な体験を提供することを目的としている。

具体的な手法として、特撮の視覚言語の本質である卓上ミニチュアの形式を採用し、主役である Zine の空間的な物語を補完することを目的としている。粘土による質感表現、3D プリントによる精密造形、樹脂による流体表現を組み合わせ、特撮の物質感を再現した。これにより、鑑賞者は情報の受容を超え、作品の隠喩を情動的に追体験することが可能となる。

4.3. 展示計画

本研究の修了展示は、制作物単体の提示にとどまらず、「見て、読んで、体験し、拡散する」という一連の統合された鑑賞体験(図 6)として設計した。

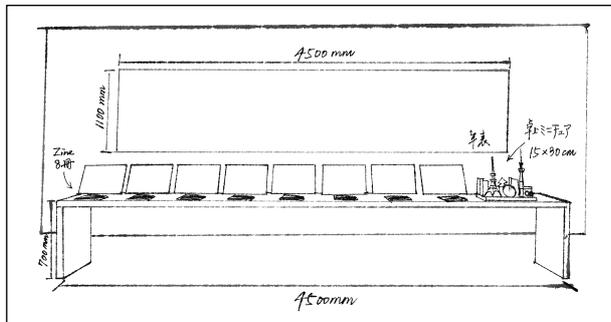


図 6 展示計画

まず、壁面の視覚年表を通じて特撮と歴史の相関を俯瞰し、展示台にて Zine『KAIKI』の 8 冊を読む、右側に展開されるミニチュアの風景を神の視点で眺めることで、破壊のメタファーを視覚的かつ情動的に追体験することを目指した。

この多層的な体験は、最終的に QR コードを通じた公式 Instagram へのアクセスへと接続される。鑑賞者はオンライン上で情報を補完し、自身の思考や感想を外部へと共有・拡散する。この循環により、研究の社会的影響を展示室から現代社会へと拡張させることを狙った。

5. おわりに

修士課程での『KAIKI』制作は、特撮のメタファーを再解釈し現代へ繋ぐ思索の旅であった。

デザイナーとクリエイティブディレクターとして、執筆や対話を通じ、タイポグラフィの魅力とコミュニケーションの重要性を痛感した。本研究は Vol.7 で一区切りとなるが、今後、さらに適切な表現で探求を続ける。Zine は若者の声を届ける有効な手段であり、山積する社会問題に対し、自ら未来を築くヒントが特撮の「影」には隠されている。研究対象を広げ、物語の時代的寓意を再考し続けることが、より良い世界へ繋がると信じている。本研究が、一つの「抛磚引玉」となり、これを手にした誰かの思考を刺激し、新たな行動へと繋がる小さな種火となることを願ってやまない。

最後に、私を二年間導いてくださった佐藤直樹教授をはじめとする諸先生方、支え合ってきた先輩・後輩・友人、そして遠くから常に温かく見守ってくれた家族へ、心からの感謝を捧げる。

私自身への自戒と、これからの未来を共に創りゆく皆さまへの精一杯の激励を込め、人生の指針とも言えるこの言葉を分かち合いたい。より良い世界を成すための、終わりのない旅を皆さまと共に。

「未来は変えることができる。良いようにも、悪いようにも…それを成すのは君たちだ。」

注、引用

- 1) 特撮とは、特殊撮影技術(Special Effects)を指す略称、または SFX が多用された映画やテレビ番組などの映像作品を指す総称。本論内で特撮映像作品を指す。
- 2) 再視聴の全作品は、『ウルトラ Q』(1966年)から『ウルトラマンアーク』(2024年)までの作品である。視聴ネットは TSUBURAYA IMAGINATION と Bilibili である。

他参考文献

- ・ 庵野 秀明、樋口 真嗣、『平成 24 年度 メディア芸術情報拠点・コンソーシアム構築事業 日本特撮に関する調査』、森ビル株式会社、2013 年
- ・ 福嶋 亮大、『ウルトラマンと戦後サブカルチャーの風景』、PLANETS/第二次惑星開発委員会出版、2018 年
- ・ 好井 裕明、『ゴジラ・モスラ・原水爆：特撮映画の社会学』、せりか書房、2007 年
- ・ 鈴木 美潮、『昭和特撮文化概論 ヒーローたちの戦いは報われたか』、集英社クリエイティブ、2015 年
- ・ 切通 理作、『怪獣使いと少年ウルトラマンの作家たち 増補新装版』、洋泉社、2015 年
- ・ 野中 モモ、ばるばら、『日本の ZINE について知ることすべて：同人誌、ミニコミ、リトルプレス—自主制作出版史 1960~2010 年代』、誠文堂新光社、2017 年
- ・ 中野 慎夫、『HD 映像伝送による教育現場の共感空間実現の研究』、総務省、2006 年